

大学の中で育つ小さな子どもたち

濱崎由紀子

(保育所保育士)

いずみナーサリーはお茶の水女子大学の敷地内に位置し、保育室は附属幼稚園の『お山』に面し、〇歳から三歳未満の二十人ほどが在籍しています。利用日数選択型のため、全員が毎日そろろうわけではなく、子どもたちが出会ったり友達も曜日によって異なります。

ナーサリーのお散歩

ナーサリーのお散歩は、主に大学構内に行きます。子どもたちの格好の遊び場となるのが、『中庭』と呼んでいる本館の建物に囲まれたスペースと、『広場』と呼んでいる学生会館前庭の芝生スペース

スです。

『中庭』は、本館からほかの建物に抜ける通路でもあり、建物出口の階段やスロープ、学生用の連絡掲示板などがあります。中央の大きな枝垂れ桜の周りは芝生スペースで、子どもたちは、芝生で虫を探し、階段やスロープの上り下りを楽しみ、掲示板や照明灯を挟んでかくれんぼをしたり、ベンチをステージにして歌ったりします。マンホールのふたにたまった小さな水たまりでさえも、「モグラの穴かな？」と指でつついたり、ぬれた指先でお絵かきが始まったり、広い戸外での小さな遊びも見つけます。

階段下の暗くて冷たい空気穴は「おぼけちゃんのところ」と呼び、子どもたちは声を掛けたり、葉っぱや花のプレゼントを届けに行ったりします。冷たい風が吹き、不思議な音がすると、緊張した表情になります。格子に隔てられている余裕があり、保育士の手を握っていることで勇気を振り絞っているようです。遊び場として作られたわけではない『中庭』ですが、大人が思いつかないような楽しみ方を見つけ、飽きることなく遊びます。



『広場』は、芝生の地面が広がり、草丈が伸びた雑草や植え込みは、子どもたちから見るとちょっとしたジャングルです。少し伸びた草を飛び越え、茂った草の間を通り抜けることで、達成感や自信をつけるようです。初めは地面に足を下ろすことさえ勇気が要った子ども、土を触り、草を抜き、

凸凹に足をとられながらも歩いて転んで立ち上がって、地面の手触りや温度の違いを感じ取るうちに、気持ちも動きも柔らかなるようです。

『広場』の真ん中にはS字カーブのコンクリートの通路があります。落としたボールが通路を転がる様子を見た二歳のK男が、「ドンブラッコッコ、ドンブラッコッコと流れていきました」と『ももたろう』の一節をつぶやくと、ボールを追いかけていたほかの子どもたちも立ち止まり、流れていくボールを見送っていました。子どもたちの心の中で、一瞬のうちに通路が川に姿を変えています。



子どもたちが歩く大学構内は、学生が次々と通り、職員の方も行き来します。出会う方々からの温かいまなざしを感じ、時には声を掛けてもらっ

て喜んだり（あるいは恥ずかしくなったり）、時には通る方のお邪魔になったり（あるいは子どもが道を譲ったり）と、保育士以外の大人とのふれ合いがあります。

大学構内という安全が確保された場でのびのびと遊べることは、安心と環境面でもありがたいことです。そして、周りの人に温かく迎えられていることは、子どもにとっても心地よい場になるようです。遊び場として作られていなくとも、大人の環境として安全で清潔な場所は、子どもにとっても安心して活動できる場所なのだと感じます。これは、ナーサリーの子どもたちが大学構内を散歩するようになって十余年で、少しずつ育まれていった環境でもあるのかもしれませんが、感謝しています。

言葉で伝わる育ち

ナーサリーで過ごす子どもたちは三歳未満の幼児ですが、言葉から成長を感じる場面が多くあり、

子どもから伝わってくる気持ちの豊かさ、言葉で伝えることの大切さに気付かされます。心に残った場面を紹介します。

植えてあるの？（K男・2歳11か月）

『中庭』で「おぼけちゃん」へのプレゼントの葉っぱを探していたK男が、私の隣で雑草の花を折り取ろうとして手を止め、「これ植えてあるの？」と聞きました。「植えてあるのじゃなくて、生えている草よ」と答えると、安心したように折り取り、私に向かって「はい、たんぼぼだよ」と手渡してくれました。

ほんの一瞬のことですが、「植えてあるのは折ったらだめかな」という気持ちで手が止まり、それをそばの大人が認めてくれたことで安心して折り取り、優しい物腰で手渡してくれる……こんな小さな子どもものの心の中に、これほどの思いや判断や経験が積み重ねられて、それを言葉で伝えるのかという、驚きとともにとても印象的な出来事でした。

どうしてお口とほっぺが動くの？（S男・2歳11か月）

昼食時に友達が食べる姿を見て、S男は「食べている時は、お口が動くかどうかとどうしてほっぺが動くの？」と尋ねてきました。S男は発見したことや家で聞いたことを保育士に話してくれることも多く、うっかりすると聞き逃してしまうようなこともあります。また、どんな言葉で返すか、言葉選別に苦心することもあります。この時は、「S男くんのほっぺも動いているよ」と私が言うと、ほかの子どもも「ほんとだ、〇〇ちゃんのも動いている」とお互いの顔を見合わせながらの和やかな食事場面となったのですが、S男のハテナには答えられなかったかな、と思いました。

入れてみようか（N子・2歳11か月）

ナーサリー前庭の砂場で遊んでいた時、混雑した砂場の中には入りにくかったN子が、小さなカップを手持って砂場を眺めていました。私が「お

砂入れる？」と聞くと黙っているの、「入れなくていい？」と聞くと首を振り、「じゃあ入れる？」と聞いても首を振ります。少しすると、N子は「入れてみようかな」と答えました。「入れる」とか「要らない」ではなく、「入れてみようか」という言葉が、とてもしなやかに大らかで、〇か×だけでなく、受け入れてあげようかな、その先に面白いことがあるかもしれないしね……という気持ちが伝わってきて、こちらの気持ちが柔らかくなる瞬間でした。

子どもからの言葉で育ちを感じることはもちろんですが、大人の言葉が子どもたちを育むことは言うまでもありません。日々の保育では、物だけでなく、人の存在、人が醸し出す雰囲気すべてが環境となっていることを感じます。保育の場にいる大人の動き、動作、言葉のすべてが子どもたちへの環境となっていることに向き合いながら、小さな人たちとの生活を楽しまたいと思っています。